

くずれる水

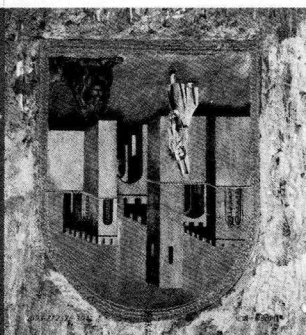
金井美恵子



くずれる水



くずれる水・金井美恵子



くずれる水

くずれる水

一九八一年七月二五日 第一刷印刷

一九八一年八月一〇日 第一刷発行

著者／金井美恵子

発行者／堀内末男

発行所／集英社 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇

郵便番号一〇一／電話〇三・二三八・二七八一（販売部）

二三八・二八四二（文芸出版部）

印刷所／大文堂印刷・錦印刷

定価／九八〇円

©1981 Mieko Kanai, Printed and bound in Japan

0093-772326-3041

著者との諒解により検印は随止します

乱丁・落丁の本はお取り替えます

く

ず

れ

る

水

金

井

美

恵

子

集

英

社



河口………5

くずれる水………33

水鏡
35

くずれる水
49

水入らず
99



水鏡、
あるいはリング

.....
195

洪水の前後

149

装幀

金井久美子

河

口

もう、ずいぶん長いこと歩き続けているのだが——かなり長いこと歩き続けている。どれくらいの間が経ったのか、正確には、むろん、わからないけれど——河口近くの橋の半ばまで来た時に、ようやく夜が終りかけようとしていた。

夜が終る、というか、夜の幾重にも重ねられた暗闇のずっと奥のほうで、寒々とした太陽がのぼりはじめる微かな気配が感じられ、鈍く色を失って水色がかった白っぽい傷口のように見

える夜明けの三日月が橋の上空に沈みかけ、一面の黒い河口の水面に、海の方から吹いて来る冷たい夜明けの風の渡る小波が立ちはじめのを、運河のある街へ通じる橋の上に長いことたたずんで見つめた。黒い重苦しい半流動性の水面に橋の両側にともされたオレンジ色の照明が、水に溶け込むように滲んで映っているのを眺め、さらに眼をこらすと、河口の岸に近い水面に、何艘もの小さな薄汚ない木造のだるま船が舳つてあるのが見えた。橋の上を、時々、赤い「空車」の文字を浮きあがらせたタクシーがスピードを落しながら彼の後を通りすぎ、川向うの街からの遊興帰りの酔客か、それとも自殺志願者であるのかを確かめて行くのだが、もちろん、「そのどちらでもない」と呟く。「ただ、歩いているだけだ。まるで、目的もなく」

気温が一番低くなる時分だったし、河口の広い水面の上を渡って来る風は、凍った冷気の粒のように、顔面や耳や首すじに突き刺さるので、こんな夜中の散歩はやめて、早く家に帰り暖かい寢床にもぐり込むべきだ、と思う。もぐり込んだ当初は部屋の空気と同じくらいにシーツの感触は冷えびえとしているかもしれないが、しばらく身体を丸め毛布をすっぽり被ってうずくまっている間に、冷えきった身体の血液の流れが徐々に暖められて解きほぐされ、それが同時に動物のような眠む気を身体の内からほぐし出し——まるで血液と同じように眠む気が骨髓で作られ出される液体状の精分であるかのように——透明なねばつく液体でもある眠む気は、糸状の、いや包帯状の薄い柔らかな皮膜となり、身体の一部を——多分、足の指の一本ずつからは

じまつて——ゆっくりとゆっくりと包みはじめるだろう。水の紐に巻きとられていく肉体——。

それにもかかわらず、戻るべき方向がわからなかったので、「ともかく歩きつづけなければならぬ」と考える。道に迷ったというわけではなかったし、第一、はじめは休日の夕食後の軽い散歩のつもりだったのだ。いつも——といっても週二回ほどだが——夕食をそこで食べる店に行くまえに、クリーニング屋に寄ると、冬のスーツはなかなか見つからないのだった。店で渡された小さな桃色の紙の、スーツなりシャツなりを確かにあずかったという証明書のようなものもなくしてしまっていたせいもあったのかもしれないが、ごく平凡な既製品の、かなりつかれているグレイのフラノのスーツ（上着の左だか右だったかの裾に煙草の焼けこげの穴が一個ある）を見つけたために、洗いたてのように赤く光っている顔をした主人は、安っぽいジャカード織りまがいのカーテンで仕切られた店の奥に入って長いこと仕上がった洗濯物の入っているビニールの袋をがさがさ言わせながら——店のカウンターに妙にあだっぽい仕草で肘をついている女房は小さな声で囁くように、ねずみみたいにがさがさ音をたてる人、と言って馬鹿にしたように鼻を鳴らす——グレイのフラノのスーツを探していた。

黒い新建材のカウンターに妙にあだっばい様子で肘をついていたクリーニング屋の女房は、待ちあぐねて苛々してカウンターの縁を指でこつこつたいていた手を、まるでいきなり両手でとらえて、指をもてあそぶようにいじりはじめのだった。指の付根の柔らかな皮膚に軽く爪をたてるようにしたり、そればかりか、しまいには指を唇に咥え、実に丹念なやり方で舌を使い一本一本指を舐めまわしたりもする始末だった。手を引っこめようとはしたのだが、女の手の力は思いのほか、痛味を感じるほど強く、手首をしっかりと締めつけているので——まるで締めつけられている部分の血行が止って周囲の皮膚が変色してしまうほど——もし、どうしても女の手を振り放そうとすれば、おおかた腕相撲をするような騒ぎになったのに違いなかった。

「やめてください」と小声で言うが、女はいっこうにやめる気配もなく、眼で笑いながら、指を唇に含んだまま、いやいやをするような妙に子供じみた様子で、首を振るのだった。

すっかり困惑して、いったいどうなっているのだろう、と考える。今まで、クリーニング屋の女房は、そんな素ぶりを見せたこともなかったし、それどころか、いささか鈍い客あしらい——シャツの枚数を間違えて計算したり、他人の洗濯物を渡してよこしたりがいつもだったのだ——そのたび、苛々しながら、嚙んで含めるように、間違いを説明したものだ。それにもかかわらず、いつもこの店を利用しているということは、この女に魅力を感じていたせいなのか

もしれない。

むろん、そうされながら——指をもてあそばれながら——まるで不快だったわけではなかったが、それにしても、ガラス戸を一枚へだてただけの商店街の通りには人通りもあり——商店街のほとんどの店は公休日だったので、人通りはまばらではあったけれど——それだけでなく、安っぽいものがいもののジャカード織りのカーテンのむこうでは女の亭主が、それとも知らず——あるいは自分の妻の性癖をよく知っていて、わざとそうさせているのかもしれない、とも思えるのだが——グレイのフラノのスーツを探していたし、とにかく奇妙な感じだった。夢の舌で指を舐められているみたいだ。濃く引かれていた口紅と唾液で、汚れているというわけではないが、赤い汚点だらけになって濡れている指を、エプロンの裾でふき取りながら、クリーニング屋の女房は、まったく平静な口調（洗濯に出されるあらゆる布製品が、どんな高価なものであるにしても、ここでは単なる汚れ物にすぎない、とでもいったふうの一種の素っ気なさでもって）で、「きれいな指ね」と言った。長い時間をかけてようやく、冬のスーツが、どうしても見つからないと言うために主人がカーテンの背後からあらわれ、よく探しておくから申し訳ありませんけれど、また、いらしていただけないでしょうか、と言った。

煙草の焼けこげの穴のあいたスーツを職業着として着るわけにもいかないだろうし、それに、もうかなり古びてもいるのだから、今年は、まあ、新しいスーツを買わないわけにはいか

ないだろうから、見つからなくても、それは別にかまわないのだ、と言わずもがなのことを、まるで何か弁解するように（半ば独り言のような調子で、そわそわとあらぬ方向に視線を漂わせながら）言って、いくらかあわてて店を出た。

それから、商店街の行きつけのレストランに行き、よく知っていて変りばえのしない——うまくもないし、そうまずくもない——メニューをゆっくり時間をかけて検討し、結局その店ではそれしか注文したことの無いフライの盛合せとコンビネーション・サラダとビールを注文し、大して食欲もなかったもののろろと注文した料理を食べながら、さきほどのクリーニング屋の女房の振舞いについて考えた。「ようするに、あの女は、ただそうしただけなのだ」と考え、もっともらしい意味を探ることはやめてしまう。

「もちろん、あの女と寝てもいいのだが」平凡な特徴のない顔立ちをしているが、眼付きにあだっばいところがあるし、白い半袖の、床屋が着ているような襟首のつまった木綿のユニフォーム風の上着からのぞいている腕——いつも店にこもっているアイロンかけの蒸気にむざれて、少し汗ばんでいるように湿り気のある薄桃の柔らかな円筒——には、たしかに、いつも眼を奪われていたし、それに、あんなことをするくらいだったら、いや、そうではなく、むしろ、

こう考えるべきなのだ。あの女は、男の指をしゃぶることだけが好きなのだ、と。

注文をききに来た若いウエイトレスは、今日はじめてみる顔で、その娘が新しく店に入ったウエイトレスだということは、調理場のカウンターの前に立って、こちらに後姿を見せている時から気がついてはいた。

背丈はそんなに高くはなかったが、濃いブルーのユニフォームが身体の線をすっきり見せていて、脇の下から白いエプロンの紐で区切られているはっそりとしたウエストまで続いている半ばかたそうで半ば柔らかな輪郭に、しばらく見惚れてしまう。ウエイトレスは、少し生意気そうな仕草にも見えるのだが腰に両手をあて胸をそらし気味の姿勢で——そのためにウールのユニフォームの布地を透して肩甲骨が小さな三角形に浮びあがり、まるで、上体を反らす体操をしているように見えた。

軽い身のこなしで彼女はテーブルにやって来て注文をきくのだったが、料理の皿を運んできてそれを腕を伸ばしながらテーブルに置く時、伸した右の二の腕の内側に、薄い紫色の、地図のなかの島のように見える——マダガスカル島の形をしていなかっただろうか。薄紫色の痣の端に、地図のなかの首都の印のように見える米粒のような青いほくろがあつて——痣があること

を発見する。「唇を押しあてたくなるような痣だ」と思い、まるでその気持が伝わりでもしたように、若い娘は顔を赤らめて、わざとのように顔をうつむけ、まともに顔を見られまいとしているように見えた。もちろん、淡い紫色の二の腕の内側にある痣は、腕が男の背中に巻きついて興奮して震えている時には、汗ばんで薔薇色をおびた鮮やかなすみれ色に変わるのだ、と思う。微かな欲情というか、あるいは、微かな愛情といってみたほうが正確かもしれない気持ちを若い娘の二の腕の内側の痣に抱き、それを、「まるで、夢の中で感じているようだ」と思う。「今日は、どういう日なのだ？」と思い、あたためられた空気と調理場で火にかけられた料理や湯のたてる蒸気で灰色の霧のようにくもっている窓ガラスをぼんやり眺める。するとウエイトレスは、白いタオルの台ぶきんで窓ガラスの表面の微粒状の水滴を丸くふきとり、丸く削りぬかれた透明なガラス越しに、商店街の家並の間から冷たい水色の両端が鋭い角のようにとがった彎曲した三日月が、シューシュー鋭い音をたてて昇りはじめる。

それから、店の顔なじみの客たち——同じような独身者たち——とビールを注ぎあいながら、あたりさわりのない世間話をかわし、店を出ようとした時、レストランの主人に小声で、戸籍上の手続きについての「ちょっと、まあ、お恥しい事情」を含んだ質問をされ、そのため